The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	関西若年層のカジュアル談話にみるスタイル切換え：首都圏移住者を例に
Author(s)	上林，葵
Citation	阪大日本語研究. 2020, 32, p. 37-61
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76118
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』32（2020）

関西若年層のカジュアル談話にみるスタイル切換え
―首都圏移住者を例に―

Style-Shifting of Kansai Speakers in Casual Situation: Focusing on youth who relocated to the Tokyo metro area

上林 葵
KAMBAYASHI Aoi

キーワード：関西若年層、移住、首都圏、カジュアル談話、スタイル切換え

要旨

本稿では首都圏に移住した関西若年層（3名、20-21歳）を対象に、出身地域の異なる友人と同じ友人の2人をそれぞれ相手にしたカジュアル場面での文法項目の切換えの実態について、合計約6時間分の談話資料をもとに明らかにした。はじめに各話者の運用に注目し、対他地域出身者場面と対同郷出身者場面で使用形式が明確に異なるタイプの切換えを行っていること、対他地域出身者場面により配慮した運用となっていることを述べた。そしてこれらが従来の関西方言話者の運用特徴とは異なることを指摘した。次に個々の場面での運用に注目し、対他地域出身者場面では東京語形を、対同郷出身者場面では伝統的な関西方言形を、各場面の対者と同等以上に用いていることを述べた。そしてこうした話者自身が置かれている場面の特性を顕著に表した言語形式の選択が、移住者に特有の運用の在り方である可能性を指摘した。

1. はじめに

マスメディアの普及や交通網の発達に伴う人口の流入により、現代の地域社会では地元の方言以外の変種に接する機会が以前に比べ豊富になった。特に標準語との接触は日常的といえ、好悪や志向の意識の違いはあるにせよ、若い世代を筆頭に標準語を理解・使用する能力が潜在的に身についていると思われる。本稿は方言と標準語の2つのスタイルを有する話者が、どちらでも用いられ得る環境に身を置いた際に、どのような言語運用の在り方を選択・実行するのか、その実態を文法項目の側面から明らかにすることを目指す。特に従来からモノリンガル的な運用傾向にあるとされてきた関西方言話者を対象に、その傾向が現代の若年層にも健在なのか、あるいは潜在的な標準語運用能力が発揮されるのか、その様相を事例的に示してみたい。

すなわち本稿は、首都圏に移住した関西若年層のカジュアル談話におけるスタイル切換えの実態について、文法項目を対象に分析・考察することを目的とするものである。その内容は以下の構成に従うものとする。まず2節で先行研究と問題のありかを整理し、3節で調査の概要を

説明する。続く4節では各話者の切換えのタイプ及び共通点を談話データから導き出し、切換えの全体像を把握する。5節では各場面の対者のデータとの比較を通して、場面間の切換えの在り方の特徴をより明確に描き出す。最後に6節でまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究と問題のありか

本節ではまず、従来のスタイル研究の概要を踏まえつつ、「スタイル」及び「スタイル切換え」の概念に関する本稿の立場を述べる（2.1節）。そして本稿の分析対象である関西方言話者、あるいは関西という地域がこれまでの切換え研究の中でどのように位置づけられてきたかを概観し、国内の切換え研究における課題を示した上で（2.2節）、本稿の目的を述べる（2.3節）。

2.1.「スタイル」と「スタイル切換え」に関する本稿の立場

社会言語学における主要な課題の1つである「スタイル」を巡っては、これまで国内外を問わず多種多様な研究が蓄積されてきた。その位置づけは、きわめて大まかに述べるならば、次のような変遷をたどる。まずLabov（1972）に代表されるような初期の研究のモデルにおいては、社会的なカテゴリーやアイデンティティはすでに与えられた所与のものとして捉えられ、スタイルはそれらに沿って選択される受動的かつ固定的なものと捉えられてきた（Rickford & Eckert 2001）。対する近年においては、社会的カテゴリーやアイデンティティは持続的に構築されるものとみなされ、スタイルはその構築プロセスの資源として能動的かつ創造的に、個別具体的な場面に沿った適切性を伴って現れるものと解釈されるようになった（Rickford & Eckert 2001; ハインリッヒ2016）。

一方の日本国内におけるスタイル研究は、方言と共通語の使い分け、あるいは丁寧体と普通体の使い分けを巡ってなされてきた（渋谷2015）。研究の進展に伴い複雑化する日本語のスタイルの捉え方に鑑み、宇佐美（2015）は日本語におけるスタイルあるいはそれに類する用語や概念を用いた研究を整理・概観した上で、スタイルを「『個人の、一言語内の複数の変種の使い分け』を扱うもの」（p.9）とまとめている。この「使い分け」については相手の属性（出身地、性、年齢、職業など）や相手との関係（上下、親疎など）、置かれた状況（フォーマル・インフォーマルな場面など）、話題、目的、メディアなど、様々な要素が要因となって行われ（渋谷2008; 2015）、また、スタイルを構築する要素としては、敬語やデスマス体、種々の言語項目などの個別形式に加え、「勧め方」や「誘い方」といった発話行為のレベルも含まれるとしている（宇佐美2015; 渋谷2008）。

本稿におけるスタイルも基本的に上記の日本語におけるスタイルの定義に則るものとする

が、このように一個人の中に様々に備わっているスタイルのうち、本稿では特に方言ないし標準語といった地域変種的要素の反映されたものに着眼する。すなわち、各種言語項目の（関西）方言形を基調とした「方言スタイル」及び非方言形（標準語形、東京語形）を基調とした「標準語スタイル」に焦点を絞った上で、それらの運用の在り方を探る。このようにスタイルを限定した理由は冒頭でも触れた通り、社会構造の変革等に伴い複数の変種を保有する地域構成員が増えつつある中、特に方言のモノリンガル的運用傾向が強いとされる関西出身者の運用の実態をみる上で適した尺度であると考えたことによる。

続いて「スタイル切換え」について本稿の捉え方を述べておく。宇佐美（2015）はこれまでの日本語におけるスタイル研究の基本的特性として、スタイルを「ある場面で使用されることば全体を総称して言う場合が多い」（p.9）と指摘している。先に述べた「一個人が場面等に応じて使い分けるもの」というスタイルの定義も、スタイルが個々の形式のみを指すのではなく、それらを含む包括的な概念として捉えられていることを示している。これらの点を踏まえると、「スタイル切換え」は一個人が様々に有するスタイル（＝ことば全体）を、相手や状況、目的等の場面によって切換えるという行動そのものであるとの解釈が可能である。詳細は3節で述べるが、本稿では相手の属性（出身地）を軸としたスタイルの異なりを「スタイル切換え」と捉えることとし、（1）にその例を示す。下記の2例は同一話者が発したものとする。

（1）　本稿におけるスタイル切換えの例

〔対関西出身者場面〕昨日<u>な</u>、そこで<u>どえらい</u>事故<u>φ</u>あって<u>てん</u>。⇒方言スタイル

〔対他地域出身者場面〕昨日<u>ね</u>、そこで<u>すごい</u>事故<u>が</u>あった<u>の</u>。⇒標準語スタイル

〔対関西出身者場面〕における下線部の各形式は関西方言的要素であるため、この例に限れば、同場面は方言形を基調とした方言スタイルが選択されていることになる。対する〔対他地域出身者場面〕は下線部がそれぞれ非方言（標準語）的要素を指すことから、これらを基調とした標準語スタイルによって実現されていることを示す[1)]。本稿ではこのように同一の話者が場面によって異なるスタイルを用いる事象を「スタイル切換え」とし、以降「ことばの切換え」や「スタイル切換え」、「切換え」などの表現を用いる際は特に断りがない限り、こうした場面間の切換えを指すものとする。

なお、中には同一場面において性質の異なる形式が併用されるケースも考えられる。次例は他地域出身者を対者とする場面の中で、方言的要素と非方言的要素が同時に現れた例である。

（2）〔対他地域出身者場面〕昨日<u>ね</u>、そこで<u>すごい</u>事故<u>φ</u>あって<u>てん</u>。

主にデスマス体及び非デスマス体の使用等を対象とした「同一相手との同一会話内で、一時的にシフトしたり、元に戻ったりする現象」を扱う研究では、こうした現象を「全体的なスタイル」の切換えと区別し、「スピーチレベルシフト」と表現する場合が多いという（宇佐美2015:10）。

本稿はデスマス体の使用・不使用にみるようなフォーマル度を捉えるものではないが、異なる要素の一時的な出入りに着目しているという点では、(2) にみたような方言形・非方言形という異なる要素の併用もまた「スピーチレベルシフト」に類する事象といえるだろう。したがって本稿では (2) のように、複数のスタイルが同一場面に現れた場面内の切換えの事象について言及する際は「スタイルのシフト」「移行」ないし「場面内切換え」と表現し、既述の「スタイル切換え」とは区別するものとする。

2.2. 切換え研究における関西地域の位置づけと諸課題

国内のことばの切換えに関する研究では、切換えの特徴を話し手の出身地域に応じて類型化する試みが行われてきた。その多くは次表に示すように、関西地域をある特定の類型を成す地域として位置づけている。

表1　切換えにおける関西地域の類型

研究名	類型	類型詳細	該当地域
寿岳（1977）	関西型	郷土でも郷土以外でも方言を使用する	**関西**
陣内（1996）	無意識的顕在化型	母方言がスムーズに出ても一向に構わない	**関西（特に大阪）**・北九州・福岡
陣内（1999）	方言開示型	どの場面でも方言使用率が相対的に高い	**京都**・東京・札幌・福岡
田原（2006）	方言主流社会	方言を中心とした言語生活を送り、必要な場合以外は共通語を用いない	**大阪・奈良・和歌山**
田中（2011）	近畿型	異郷の友人に対する方言使用率が高く、方言で通す意識が強い	**近畿**
田中・前田（2012）	積極的方言話者	方言で通す傾向が強く、共通語との使い分け意識が低い	**近畿**・中国・四国
田中他（2016）	近畿・中国タイプ	相手が同郷 / 異郷を問わず方言をよく使う	**近畿**・中国

表1によると関西という地域は「場面にかかわらず方言使用を積極的に行うタイプ」であり、かつ「共通語との使い分けを行いにくいタイプ」として特徴づけられている。こうした話者の意識上の使い分けのほか、実態面についても老年層を中心に場面のフォーマル度にかかわらず方言要素を用いる傾向にあることが明らかにされており（辻 2003; 細谷 2004）、関西方言話者のモノリンガル的な運用傾向が指摘されてきた。

一方、従来の意識研究では、使い分けの在り方をみる際にごく限られた調査場面のみを対象としている場合が多く、実際には使い分けが頻繁に生じていると思われるその他の場面での調査については未だ十分とはいえない。例えば田原（2006）は先行研究をもとに①場所（東京／地元）、②相手のことば（共通語／方言）、③相手との関係（見知らぬ人／友人）を組み合わせて場面を設けたが、②と③の組み合わせは固定されており、②が共通語であれば③は見知らぬ人、②が方言であれば③は友人と自動的に決められている。これはすなわち共通語を話す人＝見知らぬ人、方言を話す人＝友人という前提のもとで調査が行われたことを意味する。

また、スタイル切換えの実態を記述した『阪大社会言語学研究ノート』（2002-2005）は家族や友人とのカジュアル場面と初対面でのフォーマル場面という２つの場面を設定したが、カジュアル場面は母方言話者同士に限定されている。このように、いずれの研究も「母方言話者以外の話者とのカジュアル場面」を対象としていない点で共通する。しかし地域間の移動が容易になり、他地域出身者同士の交流が盛んである現在、ことばの切換えの全貌を把握するためにもこうした場面の設定を追加的に検討していく必要があると思われる。

また、地域間移動の増加に関連して述べると、他地域出身者との交流は大別して「自身が他地域へ移住する・相手が移住してくる・互いに別の地域へ移住する」といういずれかの過程を経て実現すると考えられる。すなわち、他地域出身者とのカジュアル場面を捉える際には、移住という要素との関わりを考慮する必要がある。本稿では標準語スタイルの運用可能性をより探りやすくするために首都圏在住の関西若年層に注目するが（3節）、移住と言語の関係については移住先方言の習得過程や母方言の残存度合などことばの変容の側面に着目した研究が中心であり、切換えのような共時的な運用実態の記述は舩木（2011）や濱田（2011）に試みがあるものの、十分な蓄積があるとはいえない。移住先方言と母方言の狭間に置かれた話者が場面に応じてどのような運用を行うのかは、個人の切換え能力の在り方を探る上でも検討すべき課題である。

2.3. 本稿の目的

以上を踏まえ本稿では、方言使用の積極性が指摘されてきた関西方言話者のうち、首都圏への移住者を対象に、カジュアル談話における切換えの実態を明らかにすることを目的とする。具体的には以下の2点の解明を目指す。

A） 他地域出身の友人と同郷の友人に対する関西若年層の言語運用の異同

B） 移住者に特有の切換えの特徴

これらを明らかにするための分析の観点として、それぞれ次の点を設ける。

A’） 個々の話者はどのような切換え行動を行っているか（4節）

B’） 各場面ではどのような運用が行われているか（5節）

A’）のように個々の話者に注目することで、切換えの全体像（4.1節）やタイプ（4.2節）、全話者に共通の傾向（4.3節）などA）に掲げた場面間の切換えの詳細を把握する。また、B’）のように他地域の友人（5.1節）と同郷の友人（5.2節）との個々の場面に注目することで、各場面の対者のことばとの比較を通し、B）に掲げた移住者に特有の運用の特徴を導き出す。

3. 調査の概要

本稿は、2節でみたように意識・実態を問わず「方言使用」というモノリンガル的な側面に注目が集まりがちであった関西方言話者の二言語使用の側面、特に標準語スタイルの運用可能性を具体的なデータによって示すことを目的とする。この点を明らかにするためには、カジュアル場面の中でも方言使用の起こりにくい場面、すなわち標準語使用の表出しやすい場面を設定した上で、方言使用の起こりやすい普段の場面における使用と比較する必要がある。

標準語使用の表出しやすい場面における「対者」としては、関西以外の地域出身でかつ標準語スタイルを有する者、特に自方言（関西方言）との違いが意識されやすい東京式アクセントを有する者が妥当と思われる[2)]。したがってこれらの条件を満たした対他地域出身者場面（以下〔他郷〕）と、ベースとなる関西出身者との場面（以下〔同郷〕）[3)]の2場面を設定した。

また「場所」については、経済・文化・威信等の点で影響力の強い首都圏及びその近隣地域では方言使用が起こりにくいと推察されることから、〔他郷〕の調査はいずれも東京で実施した。ベースとなる〔同郷〕は一部の話者[4)]を除き、各話者の成育地にある馴染みの店舗で収録した。

表2　話者情報

	話者ID	性別	調査時年齢	職業	出身地	外住歴
	X	女性	21	大学生	和歌山県有田市	18-現在:東京都
①	Y	女性	20	大学生	大阪府堺市	18-現在:東京都
	Z	女性	21	大学生	大阪府池田市	12-18:箕面市、18-現在:東京都
	Ox	女性	21	大学生	東京都杉並区	なし
②	Oy	女性	20	大学生	神奈川県川崎市	0-2:高知県、2-4:東京都
	Oz	女性	20	大学生	静岡県三島市	18-現在:東京都
	Kx	女性	21	大学生	和歌山県有田市	18-現在:大阪府
③	Ky	女性	20	大学生	大阪府堺市	0-3:大阪市
	Kz	女性	21	大学生	兵庫県宝塚市	なし

なお〔他郷〕を東京で調査することに関して、例えば旅行など滞在期間の短いものは方言使用の起こりにくい環境として十分でない恐れがある。そこでより方言使用の起こりにくい、すなわち切換えの生じやすい環境として、首都圏に移住後1年以上が経過し、今後も居住予定のある関西若年層を対象とした。

以上を踏まえた上で、本稿が対象とする話者の情報を次掲表2に示す。①が主な分析対象となる首都圏在住の関西若年層、②が〔他郷〕の対者、③が〔同郷〕の対者である[5)]。

また、次掲表3は①～③によって得られた各話者2談話ずつの、計6談話の談話情報である。

表3　談話情報

場面	談話ID	調査協力者	協力者間の関係	調査日時	調査場所	合計録音時間	文字化時間
〔他郷〕	DO1	X-Ox	大学からの友人	2016.6.29	東京（空き教室）	64分14秒	62分03秒
	DO2	Y-Oy	大学からの友人	2016.7.2	東京（空き教室）	61分05秒	56分41秒
	DO3	Z-Oz	大学からの友人	2018.1.24	東京（空き教室）	65分09秒	62分59秒
〔同郷〕	DK1	X-Kx	幼なじみ	2017.2.10	東京（空き教室）	63分21秒	61分19秒
	DK2	Y-Ky	高校からの友人	2017.3.31	大阪（喫茶店）	62分38秒	60分30秒
	DK3	Z-Kz	小学校からの友人	2018.2.23	大阪（喫茶店）	60分41秒	59分33秒

談話収録は、あらかじめ調査協力者全員に同意書を渡し、調査への同意を得た上で実施した。談話を極力自然な状態に保つため、会話促進のための話題カードの提示等はせず、協力者には普段通り自由に話してもらうよう依頼した。また、携帯電話やスマートフォンの操作に対する制限等も特には行わなかった。なお収録中、調査者（筆者）は退席した。

4. 話者別にみる場面間切換えの実態

本節では関西若年層X・Y・Zの個々の場面間切換えの実態について、文法項目を対象に分析する[6)]。分析の対象とする項目は、ことばの切換えを扱った先行研究（細谷 2004; 舩木 2011他）ならびに本稿の調査で得た談話資料の観察をもとに、関西方言と標準語で対になる形を持ち、かつ量的にも分析に耐え得ると判断した計7項目（断定形式、動詞否定形式、否定疑問形式[7)]、推量形式、ノダ相当形式、間投助詞、終助詞）である。4.1節では全項目の使用結果をまとめ、場面間の運用の全体像を提示する。続いて、この全体像から浮き彫りとなった関西若年層の切換えのタイプならびに共通する特徴を4.2節と4.3節でそれぞれ述べる。

4.1. 各項目の分析結果

各分析項目の出現形式及び出現数を話者・場面別に一覧にしたものが次頁表4である。なお、発話が引用・模倣されたと思われるものは分析から除外した。また、本稿では関西方言由来の形式を「方言形」、標準語 / 東京方言由来の形式を「非方言形」と称する。以下（A）～（G）の各節において、項目ごとの運用の実態を順に述べることとしたい。

表4　各項目の話者・場面別出現数一覧

		X		Y		Z	
		〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
断定形式	ダ	178	4	183	1	63	3
	ヤ	-	70	-	132	50	87
	ジャ	-	-	-	1	-	-
動詞否定形式	ナイ	82	-	105	1	53	12
	ヘン・ヒン	-	-	-	43	5	20
	ヤン	-	6	-	-	-	-
	ン	-	36	1	23	4	8
否定疑問形式	ジャナイ	17	1	25	7	7	10
	ジャン	6	-	83	-	10	-
	ヤン（カ）	-	14	1	44	16	53
	チャウ・チャ（ウ）ン	-	3	-	6	-	2
推量形式	デショ	4	-	20	-	1	4
	ダロ	12	-	11	-	11	-
	ヤロ	-	16	-	39	3	11
ノダ相当形式※	ノ	20	2	60	-	26	-
	ンダ	52	-	74	-	16	-
	ン	-	11	-	3	-	-
	ンヤ	-	11	-	21	-	2
	ネン・テン	-	4	-	52	30	51
間投助詞	ネ	18	11	13	5	17	8
	サ	47	23	145	73	114	85
	ナ	-	6	-	16	-	3
終助詞	ヨ	5	1	68	14	11	1
	ネ	31	-	39	2	58	46
	デ	-	13	-	19	4	2
	ナ	1	9	-	72	6	33

（※）説明の機能として使用されたものに限定

（A）断定形式

断定形式に関しては、主にダとヤの使用が三者に共通してみられた。XとYは〔他郷〕ではダのみを使用し、ヤ・ジャといった方言形は用いていない。一方〔同郷〕ではヤが多くを占めるものの、ダもわずかにみられ、1例のみではあるがYにはジャの使用も観察された。次例を参照されたい[8)]。

（3）【不満げに】学生には金がないんジャ。　〈Y〔同郷〕〉

対するZは〔他郷〕でも方言形ヤを頻繁に用いており、X・Yの運用とは異なる。

（B）動詞否定形式

動詞否定形式においては、（4）（5）のようにXは〔他郷〕では非方言形のナイのみを、〔同郷〕では方言形のヤン・ンのみを用いた。Yも同様、〔他郷〕での方言形ならびに〔同郷〕での非方言形は各1例ずつであり、基本的に〔他郷〕では非方言形、〔同郷〕では方言形を用いるという運用の仕方である。

（4）なんか2年ぐらいたたナイと安定しナイんだって。　〈X〔他郷〕〉

（5）え、なんか追加できヤン。　〈X〔同郷〕〉

対してZは〔他郷〕では非方言形が多いものの方言形も計9例観察され、〔同郷〕では方言形28例に対し非方言形12例と、X・Yに比べ切換えが緩やかである。

（C）否定疑問形式

標準語の「〜ではない（か）」に相当する否定疑問形式については、ジャナイ・ジャン・ヤンカ・ヤン・チャウ・チャ（ウ）ンの6形式が得られた。表ではヤンカ・ヤンを「ヤン（カ）」とし、チャウ・チャ（ウ）ンもまとめて示した。なお、ヤナイ（カ）や（ヤ）ガナなどの従来の方言形については三者とも使用はみられなかった。

Xは〔他郷〕では非方言形であるジャナイとジャンのみを用い、反対に〔同郷〕では方言形が多くを占めた。一方Yは〔他郷〕では非方言形の使用・方言形の不使用を遵守しているが、〔同郷〕では（6）のように非方言形であるジャナイの使用が7例に上った。

（6）え、でもそれいい方ジャナイ？いいタイプの、こう、反抗ジャナイ？

〈Y〔同郷〕〉

ジャナイの〔同郷〕での使用は他の二者にもみられ、関西若年層への浸透を指摘した従来の見解（高木2006）に一致する結果となった。他方の非方言形ジャンに関しては、〔他郷〕では（7）のように頻繁に使用がみられたのに対し、〔同郷〕では三者とも一例も用いていない。

（7）ぶっちゃけさ、スーパーで50いくつジャン。て感じジャン。　〈Y〔他郷〕〉

ジャンは非方言形の中でも文体的に低く、いわゆる東京方言由来の形式として主に首都圏のカジュアルな場面で用いられるのが一般的である。加えて、関西では対応する方言形ヤン（カ）の使用が根強く維持されている点などから、ジャンは関西方言話者にとって東京方言色が特に強く、抵抗意識を抱かせる形式のようである（ロング 1990）。関西出身者同士の場面である〔同郷〕でジャンがみられなかったのは、このような点によるものと考えられる。

なお、（8）（9）のようにZは〔他郷〕で非方言形に限らず方言形も積極的に用いており、その切換えはX・Yほど厳密ではない。

（8） なんか普通、朝起きたときに返すジャン、ラインって。　〈Z〔他郷〕〉

（9） あ、ちょいちょい病むヤン、あの子。　〈Z〔他郷〕〉

（D）推量形式

推量形式はデショ・ダロ・ヤロの3形式が得られた。〔他郷〕ではヤロに対応するダロに加え、関西で比較的丁寧なスタイルとされる非方言形デショの使用が三者に共通してみられた。

（10）切られるんデショ？もう「はい、あなた無理」って。　〈X〔他郷〕〉

（11）18歳（＋を）夜勤に残すんだよ？おかしいデショ。　〈Y〔他郷〕〉

（12）あー、それしんどいねー。すごい疲れたデショー。　〈Z〔他郷〕〉

〔同郷〕ではZにデショが数例みられるものの基本的には方言形ヤロの使用が中心であり、特にXとYには非方言形の使用が一切なかった。

（E）ノダ相当形式

ノダ相当形式に関しては、説明の機能を基本とするネン・テンに対応するもののみを分析の対象とした[9)]。その結果、〔同郷〕では非方言形ノ・ンダがほとんど使用されていないのに対し、〔他郷〕では三者を通じて積極的な使用が確認された。

（13）なんか向こうがトイレ行ってる間に眠くて今のうちだけ寝とこうと思って寝てたノ。（略）それがまず3時ぐらいだったノ。「うん、大丈夫だよ」みたいな。もうすぐ切れるだろうと思ったノ。　〈Z〔他郷〕〉

方言形各種については〔同郷〕での使用が中心だが、Zに関してはネン・テンの〔他郷〕での使用も盛んにみられる。

（14）うちさ、妹が今大学受験で、2月25まではあれやネン。なんかあの、うん、あれ、二次試験があるから、そう。それがなかったら泊めてあげれテンけどね。　〈Z〔他郷〕〉

（F）間投助詞

間投助詞に関して、〔他郷〕では三者とも非方言形ネ・サのみを使用している。中でもサの使用が特に盛んである。

（15）588Z：うーん。え、でもサ、この前6時間電話したのにサ、今日なにしてる？とかまた聞いてきたらサ、ちょ《ちょっと》しつこい？
589Oz：いつ電話したの？
590Z：えーっとネ、きの《昨日》、一昨日‘おととい’。　〈Z〔他郷〕〉

一方の〔同郷〕は方言形ナの使用が三者ともにみられるが、それを凌ぐ形で非方言形の使用が目立つ。ここでもサが多用されており、当該形式が関西において「非方言形」として認識されにくくなっていることを窺わせる。

（16）なんかナ、そう、コインの変換になってからサ、　〈X〔同郷〕〉

（G）終助詞

終助詞については非方言形としてヨ・ネを取り上げ、それぞれに形式的かつ意味的に対応する方言形デ・ナを合わせた計4形式を対象とした。終助詞の切換え方は三者三様であり、Xはこれまでと同様に〔他郷〕では非方言形、〔同郷〕では方言形が中心である。Yの〔同郷〕では両形式の使用が認められるが、非方言形ヨ・ネに関しては場面間で比較すると〔他郷〕の方が数としては多い。

（17）え、いるヨ？たまに。大阪にもいたヨ。　〈Y〔他郷〕〉

（18）すっごい怒ってたヨ。めっちゃきれてたデ。　〈Y〔同郷〕〉

Zはすべての形式を両場面で用いている。〔他郷〕では非方言形が多いのに対し、〔同郷〕では方言形ナよりもそれに対応する非方言形ネが目立つ。場面間でみても方言形デが〔他郷〕の方に多いなど、切換えていない形式もある。

以上、本節では各文法項目の場面間の運用を個別的に検討した。以上を踏まえ、関西若年層X・Y・Zの切換えがどのように特徴づけられるかを次節以降で考察する。

4.2. 各話者の切換えのタイプ

4.1節及び表4の結果をみると、場面間の切換え方に関して、XとYが類似した傾向をみせているのに対し、Zはその二者とは異なる運用の仕方を行っていることが窺える。まずはXとYの切換え方の特徴について検討し（4.2.1節）、続いてZの特徴について述べる（4.2.2節）。その後、話者によるタイプの異なりの要因について考察する（4.2.3節）。

4.2.1. XとYの場合

4.1節で分析した7項目について、XとYそれぞれの各場面での非方言形と方言形の使用割合を比較したものが以下の図1、図2である。

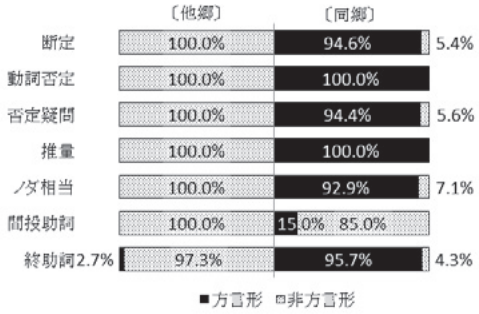

図1　各項目の場面別使用割合（X）

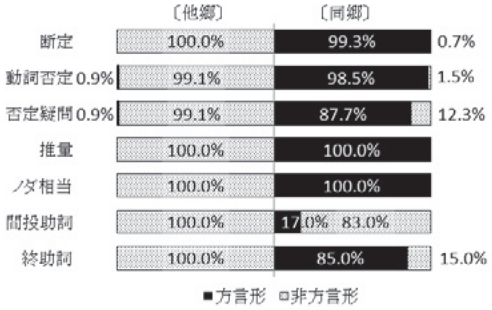

図2　各項目の場面別使用割合（Y）

両図から、X・Yのいずれも〔他郷〕ではすべての項目において非方言形が100％に近い割合で使用されている様子がみてとれる。対する〔同郷〕では、方言形が間投助詞を除きXは90％、Yは80％を超える高い割合で出現していることがわかる。

使用形式が場面ごとに決められており、当該形式を使用するか否かという絶対的な基準によって示される切換えについて、大阪大学大学院による「SSプロジェクト（渋谷2002）」では「カテゴリカル（不連続）」な切換えという用語で言及されている。関西若年層X・Yの〔他郷〕と〔同郷〕における切換えは、一部を除くほぼすべての文法項目においてこのカテゴリカルな、すなわち絶対的な傾向をみせているということが窺える。なお4.1節でも述べたように、否定疑問形式及び間投助詞の非方言形のうち、ジャナイやサに関しては近年関西若年層の間で急速に使用が拡大してきているとされ（高木2006）、それに伴ってX・Yの〔同郷〕での各項目（特に間投助詞）の非方言形の使用割合も高くなっているものと考えられる。

4.2.2. Zの場合

次に、Zの切換えの実態についてみていこう。以下の図3はZの各形式の使用割合を場面間で比較したものである。

個々の形式に注目すると、〔他郷〕ではいずれも非方言形の、〔同郷〕では一部の項目を除き方言形の使用割合が高くなっていることから、Zにおいても場面間での切換えが行われていると判断できる。ただし、その切換え方の度合いに関しては、他の二者とはかなり異なる様相を呈しており、特に〔他郷〕における方言形の割合の高さがX・Yに比べて目立つ。Zの切換え

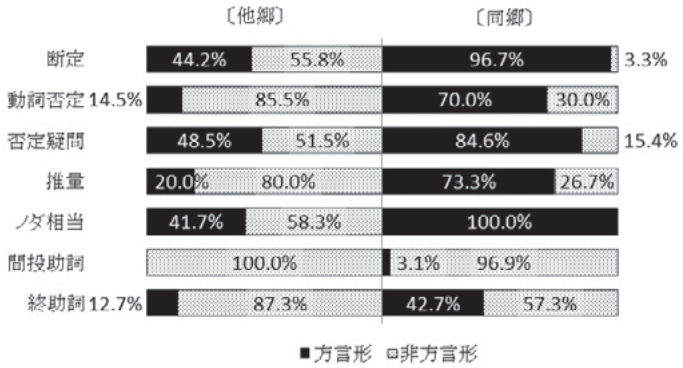

図3　各項目の場面別使用割合（Z）

はX・Yのような絶対的な切換えというよりも、場面によって使用形式の量に差がある相対的（連続的）な切換えとみるべきであろう。

このように談話全体に占める割合のみをみるとZは明確には切換えておらず、従来から指摘されてきた関西方言話者の切換えの特徴と大差がないように思われる。しかし一方で、こうした方言形・非方言形の使用割合は、果たして談話の一連の流れの中で常に一定しているものなのだろうか。

ここで、Zの〔他郷〕での使用数の割合を談話の時間軸に沿ってみてみよう。次掲図4は約60分間の談話を10分ずつに区切り、非方言形・方言形の使用比率が時間の経過と共にどのように推移したかを示したものである。

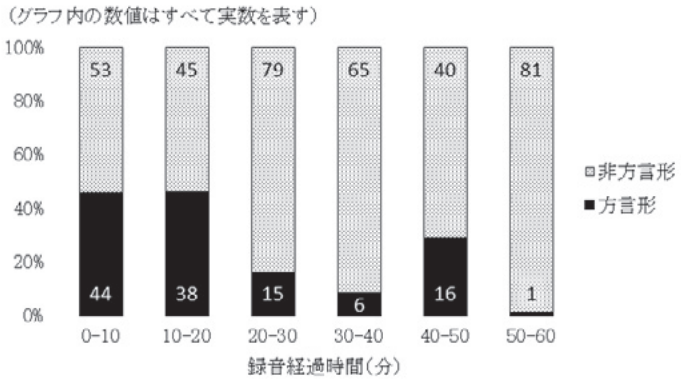

図4　〔他郷〕における方言形/非方言形の使用割合の推移（Z）

図4によると、録音開始直後の0-10分の時点では方言形と非方言形の割合は概ね拮抗しており、同様の状況が10-20分まで続いている[10)]。ところが20分以降からその比率に変化が現れる。

20-30分の時点になると、これまで50前後を推移していた非方言形の数が79にまで上昇し、反対に40前後あった方言形の数が15にまで減少している。30-40分になるとその差はさらに顕著になり、非方言形の占める割合が高くなっている。40-50分では方言形が盛り返しをみせ、対する非方言形はやや下がるものの、録音終了時近くの50-60分になると方言形はわずか1例しか現れず、ほとんどすべてが非方言形で占められている。

上記の結果はZの談話が録音開始後約20分を境に、両形式を織り交ぜた運用から非方言的言語要素の強い運用へと変換していることを示すものである。〔他郷〕におけるZの使用は談話全体にかかる値（図3）のみをみると方言形使用が際立つように思われるが、時間軸に沿ってみてみると方言形が多いのは初めのうちに限られ、談話の進行に従って次第に非方言形を中心に据えた、いわば局所的な絶対的運用へと移行していくものと思われる。

このような運用となった理由として、第一に調査開始前における調査者（筆者）との接触が考えられる。Zと同じ関西圏出身である調査者との会話により方言使用が活性化され、録音開始直後に方言形が集中するも、Ozとの談話が進行する中で徐々に移住者としての普段のモード、すなわちXやYのような標準語ベースの運用に回帰していったと推察される。

第二に考えられるのは、話題内容の性質の違いである。非方言形が増加する20分以前は様々に変化していた話題が、20分以降はそれぞれ一定の長さで持続している印象があった[11]ことから、話題の内容やそれに対する話者の集中の度合いが関係している可能性がある。話題と使用形式の相関関係については今後も引き続き検討を重ねていきたい。

以上から、X・Yは使用形式が場面ごとにほぼ固定されているのに対し、Zは当該場面に沿った形式に徐々に変化していくという異なる運用のタイプであることが示された。

4.2.3. タイプの異なりの要因

こうしたX・Yの二者とZの切換え方のタイプの違いはすなわち、切換えの要因となるもののレベルが異なることを意味している。〔他郷〕での運用でいえば、XとYは対者が非関西地域出身者であること、つまりどのような場面に身を置くかが切換えのトリガーとなっている。両者の談話全体がほぼ一貫して非方言的要素で占められているのは、この点に起因するものと思われる。

一方のZにとって対者が非関西地域出身者であることは切換えに直ちに影響はしていない。むしろどのような話題で談話を進めるかという、場面よりもさらに細かいレベルにまで達することが切換え発動の条件になっていると考えられる。同じ関西地域の出身であるにもかかわらず、このようなタイプの違いが生じるのはなぜか。個人差としてしまうのは簡単だが、ここではより客観的な事象から考え得る要因を挙げておきたい。

まずZのタイプが他の二者と異なるのは、Zの〔他郷〕の対者Ozが非関西地域出身者の中でも唯一首都圏出身でないことが関係している可能性がある。本稿は関西若年層の標準語スタイルの運用可能性の解明を目的の1つとしているため、対者が東京式アクセントの保有者であれば、出身がどこであるかは基本的に問わないことにしている（3節）。Ozの出身地である静岡県は首都圏に隣接しているとはいえ、経済・文化的規模及び顕在的威信の強さにおいては同等とはいいにくいため、ZはOzを自身と同じ「一地方社会」の出身者とみなし、方言要素の多い運用を行ったとも解釈できる。対首都圏出身者との談話であれば、ZもX・Yと同様に場面をトリガーとした明瞭な切換えを行った可能性は否定できない。

また、場面レベルで切換えを発動させた二者のうちXに関しては、和歌山県の出身であることがその要因として挙げられる。田原（2006）によると大阪・奈良・和歌山・京都のうち、和歌山と京都では地元以外の地域出身者と地元以外の場所で話す際、共通語またはそれに準ずることば（準共通語）に切換えられる傾向があるという。この点から考えると、和歌山出身のXにとって〔他郷〕は切換えを行うのに適した条件が備わっているといえ、結果的に先述の明瞭な切換えに繋がったものと考えられる。

Yの切換えの明瞭さの要因については現時点で有力な見解を持ち合わせておらず、また、上述のXやZの切換え方の要因に関しても未だ推測の域を出ない部分が多い。切換えのタイプの違いがなぜ生じたかについては、話者自身の言語意識等を踏まえた多角的な調査・分析を行う必要がある。Zの対首都圏出身者場面での調査も合わせ、今後の検討課題としたい。

なお、このようにタイプの違いがあるとはいえ、三者とも結果的に〔他郷〕が非方言形中心の運用となっていることは、2節で取り上げたこれまでの先行研究の中で指摘されている従来の関西方言話者の運用パターンにはあまりみられなかった特徴といえる。

4.3. 全話者に共通する切換え方の特徴

4.2節では、関西若年層X・Y・Zの場面間の切換えのタイプについて、X・Yの二者とZで若干の相違があることを示した。一方、三者に共通する切換え方の特徴も存在する。表5は、当該場面で本来的には使用が見込まれない形式（〔他郷〕での方言形・〔同郷〕での非方言形）の出現数を話者ごとに示したものである。

XとYの結果に注目すると、〔他郷〕における方言形がそれぞれ計1～2例程度とわずかであるのに対し、〔同郷〕の非方言形は一定数存在することが確認できる。ZはX・Yに比べると〔他郷〕における方言形をかなりの数で使用しているが、合計数の上ではやはり〔同郷〕における非方言形が上回っている。これらの結果は無論、間投助詞サや否定疑問形式ジャナイのように非方言形が自身の方言の中にすでに取り込まれ、それらを「非方言形」として意識しないま

表5　当該場面で本来使用が見込まれない形式の出現数

	X		Y		Z	
	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕	〔他郷〕	〔同郷〕
断定形式	-	4	-	1	49	3
動詞否定形式	-	-	1	1	9	12
否定疑問形式	-	1	1	7	16	10
推量形式	-	-	-	-	3	4
ノダ相当形式	-	5	-	4	56	14
間投助詞	-	34	-	78	-	93
終助詞	1	1	-	16	10	47
計	1	45	2	107	143	183

ま用いている可能性によるものであることも否めない。しかし特にX・Yについてはその点を差し引いても、〔同郷〕での非方言形使用の方が〔他郷〕での方言形使用よりも許容されるようである。

細谷（2004）は大阪市方言話者の切換えの特徴として、方言話者に対しては方言形を用いるよう注意を払い、反対に共通語話者に対しては方言形と共通語形のいずれを用いても構わないとする「方言話者を意識した切換え」を行っている可能性を示した。これに対しX・Yは、共通語話者（〔他郷〕の対者）には共通語・東京語形（非方言形）の使用を遵守し方言形を極力抑える反面、方言話者（〔同郷〕の対者）にはいずれの形式も許容するという「共通語話者を意識した切換え」になっている。この点でX・Yは従来の関西方言話者とは特徴を異にする切換えを行っているといえるだろう。

またX・Yほど明確に現れてはいないものの、Zの切換えにも類似の傾向がみられる。次掲図5は図4に示したZの〔他郷〕における各形式の使用割合の推移に加え、〔同郷〕における推移も合わせて示したものである。

これによると20-30分以降、〔他郷〕では両形式の使用数の差が徐々に開いていくが、〔同郷〕ではいずれも一定の比率を保ったまま推移しており、〔他郷〕ほどの大きな開きはない。この結果から、〔他郷〕では方言形を極力控えて非方言形を積極的に使用し、〔同郷〕ではいずれの形式が出ても許容するというX・Yにも共通する姿勢が現れたものと解釈できるだろう。

以上、本節では関西若年層X・Y・Zに共通の切換え方の特徴として、〔同郷〕の対者よりも〔他郷〕の対者により配慮した切換えを行っていることを明らかにした。また、この特徴がこれまでの指摘にみる関西方言話者の特徴とは異なるものであることを述べた。

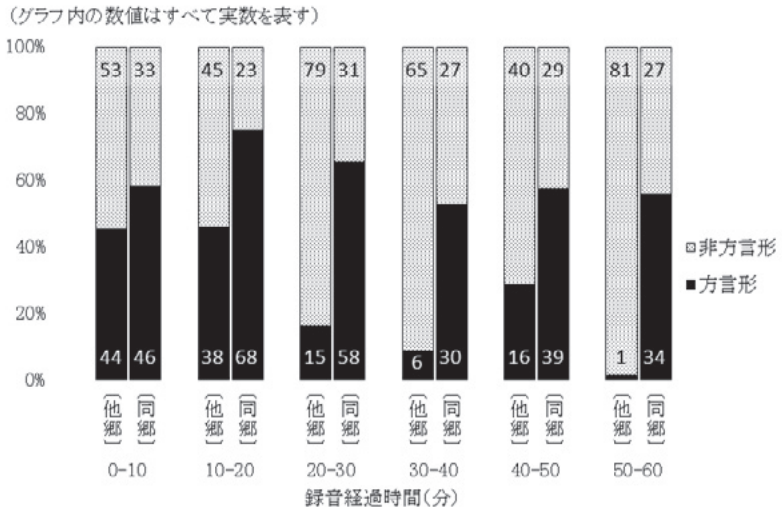

図5　両場面における方言形/非方言形の使用割合の推移（Z）

5. 場面別の運用にみる移住者としての特徴

次に本節ではX・Y・Zの移住者としての運用の特徴をみるため、個々の場面に目を向け、各場面の対者の運用と比較しながら分析する。はじめに5.1節で〔他郷〕での運用について検討し、続く5.2節で〔同郷〕での運用を分析する。

5.1.〔他郷〕での運用

〔他郷〕の場合、X・Yは談話全体を通して、Zは談話の序盤を除いて非方言形の使用がきわめて多いことを4節で確認した。その非方言形のうち否定疑問形式ジャンや間投助詞サなど、方言形に対応形式があり、かつ文体的に低いいわゆる「東京語」由来とされる形式（以下「東京語形」）が三者に共通して複数観察された。以下の表6はX・Y・Zのジャンとサの使用数を〔他郷〕の対者（Ox・Oy・Oz）と比較したものである。

表6　東京語形の出現数（〔他郷〕対者との比較）

	X	Ox	Y	Oy	Z	Oz
ジャン	6	11	83	11	10	11
サ	47 （2.0%）	12 （0.7%）	145 （5.6%）	7 （0.8%）	114 （4.4%）	28 （1.7%）

ジャンに関しては特にYが対者Oyの使用数を大きく上回っており、Zの使用数も対者Ozとほぼ同数を成している。また、サについては三者全員が対者をはるかに凌ぐ結果を示した。これは実数としてのみならず、付き得る全文節に間投助詞が付いた状態を100％とした場合に占める割合（表中の括弧内参照）からみても、同様の傾向が得られている。

関西方言話者にとってのこれらの形式は、対応する形式が関西方言に存在することとも関連してか「東京のことば」としての認識が特に強いとされ、否定的に捉えられていることも少なくない（ロング1990）。一方で中には対者に影響され、意に反して使用してしまうタイプの存在も指摘されている（高木2008）。このように、東京語形は関西方言話者にとって決して肯定的とはいえない位置に置かれた形式といえそうだが、表6の結果をみると、X・Y・Zはそうした形式をむしろ対者と同等、あるいはそれ以上に積極的に活用しているようにも捉えられる。

このような行動が取られた理由としては、以下の点が考えられる。形式ごとにみると、まず間投助詞サの多用に関しては先にも述べた通り、若年層を中心に関西でも使用が一般的となりつつあるため、他の標準語・東京語形に比べて使用しやすい側面があると推察される。また、〔他郷〕では用いにくい方言形ナに代わり、その位置をサによって代用したとも考えられる。

ジャンに関しては、対応形式である方言形ヤン（カ）を置換させた結果によるところが大きい。特にYの場合、〔同郷〕ではジャンは1例も用いられず、代わってヤン（カ）が主に用いられていた（4.1節表4参照）。また〔他郷〕では反対にヤン（カ）の使用がほとんどないことから、両形式はYにとってきわめて切換えに与りやすい項目といえる。両場面ともに否定疑問形式の使用頻度が多い点も関連してか、それらの対応置換の結果が表6におけるYのジャンの出現数の多さに現れたと推察される。

なお視点を変え、話者の言語意識の側面からこの現象を捉えてみると、また違った動機が浮かび上がる。談話調査後の筆者とのやり取りのなかで、「（移住後に訛りを指摘された経験から）自分の方言使用によって場を乱したくない」「方言使用を指摘されることによってそれまでの会話が中断されるのが煩わしい」といった意見が三者に共通して得られた。これらの内省から、X・Y・Zは対者との会話の内容に集中するためにその阻害要因となる方言形の使用を控えるのと同時に、対者の使用言語（標準語）を特徴づける形式を頻回に用いることによって〔他郷〕において求められる言語的振る舞いの実践を試みたものと考えられる。換言すれば、対者のことばに近づけていくコンバージェンスの現れとも捉えることができるだろう。

以上、関西若年層X・Y・Zの〔他郷〕における運用の特徴として、東京語形を対者と同等以上に顕著に使用していることを述べた。

5.2.〔同郷〕での運用

続いて本節では〔同郷〕での運用の特徴について検討する。動詞否定形式を取り上げ、各話者及びその〔同郷〕における対者の使用実態を比較する。はじめにXと対者Kxを取り上げる。それぞれの動詞否定形式の方言形を、動詞の活用ごとに分類したものを表7に示す。

表7　動詞否定形式の各活用における使用分布（X・Kx）

	五段		一段		カ変		サ変		可能		計	
	X	Kx	X	Kx	X	Kx	X	Kx	X	Kx	X	Kx
ン	32	48	-	6	1	-	3	2	-	2	36	58
ヘン	-	1	-	3	-	-	-	-	-	4	-	8
ヤン	-	-	4	5	1	-	-	4	1	12	6	21

まず五段動詞に関して、XとKxの出身地である和歌山県有田市では従来、ンが主な否定形式として用いられる（『方言文法全国地図』（以下GAJ）第80図）。両者の使用をみてみると、Xは従来通りンのみを用いているのに対し、Kxはわずか1例ではあるが、周辺地域の形式であるヘンを使用している。

（19）知らンやん。これの雑誌やからさ、わからン。　〈X〔同郷〕〉

（20）観光としてちゃんと行かヘンやん、近すぎて逆に。　〈Kx〔同郷〕〉

一段動詞と可能形式については、ヘンとヤンが従来の有田市方言の否定形式である（GAJ第72～79図; 大西編2016 第69図）。X・Kxに目を向けると、Xはいずれもヤンのみを用いているのに対し、Kxは従来は使用されないンを用いている。

（21）【相手が電話に】出ヤン。　〈X〔同郷〕〉

（22）あれ、くそまずいから食べンかったもん。　〈Kx〔同郷〕〉

さらに、サ変動詞に関してはンとヘンが本来的な使用だが（GAJ 第84図; 大西編2016 第71図）、従来通りンを使用するXに対し、Kxはンを上回る数でヤンを使用している。

（23）ま、予約せンでもいけるかな。　〈X〔同郷〕〉

（24）これのシリーズが、たぶん中では課金しヤなあかんけど、ある程度今ちょっと無料になってたと思う。　〈Kx〔同郷〕〉

以上から、生活圏を関西に置くKxが従来の有田市方言にはない新しい形式を使用しているのに対し、現在関西を離れているXの方が伝統的な方言形式を保持していることがわかる。Kxは進学に伴い生活圏を大阪に移したことで和歌山の周辺地域の形式を新たに取り込むようになったと考えられるが、和歌山から東京に移住したXにはその過程がないため、伝統方言形式を中

心とした移住前同様の運用になっていると解釈できる。

伝統方言形式の保持という点に関連してさらに述べると、Kxにはヘンの使用が計8例みられたのに対し、Xには一切みられなかった。有田市では従来、五段を除く各活用でヘンが用いられるが、Xはヘンに代わりすべてヤンで統一している（表7一段・カ変参照）。Xはおそらく大阪を中心とする他の関西圏にも広く使用されているヘンよりも、和歌山県方言としての独自色がより強いヤンを敢えて選択することによって、地元和歌山出身の友人Kxに合わせ〔同郷〕らしさを演出しようとしたと考えられる。このように地元にとどまる者以上に伝統方言形式を保持・運用すること[12]は、移住者に特有の特徴といえるだろう。

次に、Y・Z及びそれぞれの対者の動詞否定形式の運用の異同をみてみたい。以下の表8は五段動詞ならびに可能形式にヘンが接続した場合の実現形の分布を示したものである。

表8　五段動詞/可能形式＋ヘンの実現形

		Y	Ky	Z	Kz
五段	ア段＋ヘン	1	-	7	10
	エ段＋ヘン	16	4	-	-
可能	可能動詞否定形	-	-	-	1
	助動詞否定形	6	5	2	2

YとKy及びZの出身地を含む大阪府のほぼ全域では、五段動詞にヘンが接続する際、「行かヘン」が「行けヘン」となるように語幹末がア段からエ段にシフトした形が伝統的形式として使用される（山本1962; 岸江2004）。また、可能形式に関しては「行けヘン」のような可能動詞否定形よりも「行かれヘン」のような助動詞否定形の方が優勢であるとされている（山本1962; 真田編2018）。なお、Kzの出身地を含む兵庫県の阪神間地域では、五段動詞＋ヘンにおける語幹末がア段である点が上述の大阪府方言とは異なる（GAJ第80図; 酒井2017）。

以上を踏まえて表8をみると、Y・Kyはいずれも五段動詞ではエ段＋ヘンの形を、可能形式では助動詞否定形を中心に用いており、従来の大阪府方言の形を保持していることがわかる。Yの例を以下に示す。

（25）ただ、顔出すと金取られるから、絶対顔出せヘン。｛笑い｝絶対顔出せヘン。
〈Y：エ段＋ヘン〉

（26）だってさ、幹事長が合同（＋ライブ）の話持って帰ってきたのに、幹事長出られヘンって意味わからんくない？や、出ろよみたいな。なんで幹事長かつその合同ライブの主催者やのに、本人出られヘンねん。〈Y：助動詞否定形〉

反対に、Y・Kyと同じ大阪府出身のZに関しては、五段動詞をいずれも伝統形であるエ段ではなくア段で実現している[13)]。ただし、可能形式では2例と僅少ながら従来の伝統形である助動詞否定形を用いている。Kzは、五段動詞では本来的な形であるア段を保持しているのに対し、可能形式では1例のみではあるが、従来の出現形式ではない可能動詞否定形の使用が確認された。以下はZの例である。

（27）あたし、お父さんみたいな人絶対合わヘンわー。　〈Z：ア段＋ヘン〉

（28）そやなー。でも「＃＃＃＃」とはゆわれヘンのちゃう？　〈Z：助動詞否定形〉

続いてカ変動詞否定形に着目してみたい。次掲表9はY・Z及びそれぞれの対者のカ変動詞否定形のバリエーションの使用実態を示したものである。

表9　カ変動詞否定形の実現形

	Y	Ky	Z	Kz
ケーヘン	7	-	-	
キーヒン	-	-	-	-
コーヘン	-	2	1	1
コン	-	5	-	-
コヤン	-	-	-	-

カ変動詞否定形について大阪府方言ではケーヘンが伝統形とされているが、近年ではコーヘンなどのネオ方言形が若年層を中心に広がりをみせている（真田1987）。この点を踏まえて表9をみると、Kyにはネオ方言形が認められるのに対し、Yは伝統形であるケーヘンのみを用い、ネオ方言形は用いていないことが確認できる。用例は以下の通りである。

（29）電話とかかかってケーヘンねやったら《かかってこないんだったら》もうあんま《あんまり》家帰ってケーヘンかったり。うん。　〈Y：伝統形〉

（30）やー、たぶん高校行かしたら帰ってコーヘンと思う。とうとう帰ってこんくなると思う。帰る日の方が少ないやろ。　〈Ky：ネオ方言形〉

このように関西にとどまっている話者は新形式を活用し、反対に現在関西を離れている話者は古い伝統的な形式を保持する、という構図が先述のX・Kxのみならず、Y・Kyにもみられたのである。なお、Z・Kzからはネオ方言形のみが観察されたが、いずれも1例ずつと少なく伝統方言形を有している可能性も否定できないため、ここでは結果の提示のみにとどめておく。

また、近年では奈良・和歌山由来の否定形式ヤンをカ変動詞に接続させた「コヤン」が近畿中央部の若年層にも浸透してきているが（鳥谷2015他）、和歌山出身のX・Kxを除く他の話者からは観察されていない。ただ、YやZにとっての新形式コヤンが両者にみられない点は、裏を

返せば新しい形よりも伝統的な形がより志向されていることを示唆するものといえるだろう。

6. まとめと今後の課題

本稿では、首都圏在住の関西若年層が出身の異なる友人を相手にした場合（〔他郷〕）と出身の同じ友人を相手にした場合（〔同郷〕）の言語運用について、文法項目を対象に考察した。その結果、場面間の切換えの実態として、

a-1）使用形式が場面ごとに固定された絶対的な切換えに近いタイプ（X・Y）や、全体としては相対的な切換えになっているが、談話の進行に伴い当該場面に沿った形式に移行していくタイプ（Z）があること

a-2）全話者に共通して、共通語話者（〔他郷〕の対者）により配慮した運用が行われていること

が明らかとなった。また、移住者特有の運用の特徴として、

b-1）〔他郷〕では東京語形が対者と同等あるいはそれ以上に積極的に使用されること

b-2）〔同郷〕では伝統方言形が特に志向され、その使用は関西在住の対者以上に顕著な場合があること

を指摘した。

以上をまとめると、本稿が対象とした首都圏在住の関西若年層X・Y・Zは、個人差はありながらも、三者とも共通して、場面間できわめて異なる性格の運用を行っているといえる。特にb-1）b-2）の特徴は、話者自身が置かれている場面の特性を顕著に表した言語形式の運用が、話者自身によって選択されていることを示すものである。すなわち対者が他地域出身者であれば東京語形を、同じ地域出身であれば方言形のうち当該方言らしさがより現れた伝統方言形を用いることで、「その場面らしさ」を最大限に体現しようとする運用の在り方が移住者にはあるものと考えられる。

一方でa-1）に示したように、X・Yの二者とZで切換え方のタイプに差があることも明らかとなった。同じ関西出身者でありながらこのような違いが生じた要因については、検討の余地が残されている。今後は話者へのインタビュー調査等も視野に入れつつ、多角的に考察していくことが必要となろう。

加えて、今回対象とした話者の中にはZのように、場面間に限らず一談話内で徐々に使用形式をシフトしていく者もいた。こうした推移は他の移住経験者にもみられる特徴なのか、何がそのような運用を生じさせる要因なのかについても、引き続き注目していきたい。

注

1）（1）のように当該場面のスタイルを個々の言語要素の分析に基づいて判断することは、スタイルを「ことば全体」と捉える本稿の立場に矛盾するとの指摘もあろう。しかし「ことば全体」は個々の要素によって成り立つものであるため、その実態を明らかにするには、やはり全体を形作る個々の要素に注目せざるを得ない。当該発話がある特定のスタイル（すなわち「ことば全体」）であるかどうかは、そのスタイルを特徴づけている言語項目（スタイルマーカ（渋谷2008:18））が何であるか、それらにどのような共通特性があるか（方言形か非方言形かなど）によって判断する必要がある。こうした理由により、本稿では個々の言語要素の分析に主軸を置いた上でスタイル及びスタイル切換えを論じることとする。

2）これらの条件を満たす話者として、首都圏出身者を妥当とする捉え方もあるかと思われる。しかし本論では、関西若年層自身にとって「標準語スタイルである」と思わせる対者であれば、その出身地如何にかかわらず彼らの標準語スタイルを引き出し得ると考えた。つまり「標準語スタイル」を思わせる要素として、少なくとも東京式のアクセント（京阪式でないことがわかるアクセント）を有しているかどうかという点を重視し、選定の際の基準とした（関西方言話者にとってのアクセントの重要性については高木2006に詳しい）。後に示す表2の②に静岡県出身者（Oz）が含まれているのはそのためである。なおOzの相手である関西若年層Zは首都圏移住後に知り合ったOzが静岡県出身者であることを把握しており、かつ標準語話者としても認識していた。

3）〔同郷〕についても、対者が関西若年層自身にとっての「（関西）方言スタイル」保有者であればよいため、関西圏内であることを基本的な条件とする以外に、対者の出身地に関して制限を設けることはしていない。

4）〔同郷〕ではDK1のみ東京での調査となったが、調査場所である空き教室には談話協力者以外を入れず、現地の人々からの影響が収録に反映されないよう配慮した。結果的には、東京という場所による影響がデータに現れた様子は見受けられなかった。

5）②の話者ID及び〔他郷〕の談話IDに含まれるOは「他地域（Other area）」の頭文字を指す。また、③の話者ID及び〔同郷〕の談話IDに含まれるKは「関西地域（Kansai area）」の頭文字を指す。

6）語彙項目等についても切換えがみられたが、全話者を通じて分析に耐え得る用例数が集まらなかったことから、本稿では文法項目の考察に統一した。他の項目の切換えの実態については稿を改めて論じたい。

7）本稿では否定疑問の形（ジャナイ、チャウ/チャン）ならびにそれに由来する形（ジャン、ヤン（カ））を合わせて「否定疑問形式」と呼ぶ。なお、これらの形式及び推量形式（デショ、ダロ、ヤロ）には確認要求的表現としての用法が存在するが、本稿はあくまでも形態面の切換えに注目するため、否定疑問形式と推量形式に分けてラベルを付している。

8）4節以降の用例内における各種記号は高木（2006）に拠り、以下のように用いた。

＃：聞き取り不能であった部分を示す。推測される拍数分だけ用いる。

‘ ’：複数の読み方があるものを漢字で表す場合などに、その読み方をひらがなで‘ ’に付す。

「 」：発話中に話者以外の人物の発話が引用された場合の引用部分を示す。

（＋）：助詞の脱落等、補足が必要な要素を、文脈から話者の意図する発話がわかる場合にのみ付す。

《 》：方言形や音韻変化形、有声音化形などの共通語訳を必要に応じて示す。意味の説明や意訳なども同記号内に記す。

【 】：文脈を理解する上で必要な情報を示す。

9）説明の機能以外には、疑問を表すノやンに加え、「そうなんだ」といった応答詞に現れるンダやンヤなどがあり、いずれも場面間で切換えがみられた。なお次例に示す通り、こうした場合に用いられるノダ相当形式

には、原則としてネンあるいはテンを適用することができない。

（31）【今日の授業が休講であることを聞いて】え、そうな｛の／ン／*ネン｝？

（32）【今日の授業が休講であることを聞いて】あ、そうな｛んだ／ンヤ／*ネン｝。

10）0-20分の間も非方言形の方が方言形よりもやや多いのは、切換えがみられず両場面ともほぼ非方言形のみが用いられた間投助詞を含むためである。間投助詞を除いた場合、非方言形は0-10分で22（33.3%）、10-20分で16（29.6%）と、図4に示した数値よりも大幅に減少する。

11）20分以前の話題は、春休みの計画や実家周辺の環境のこと、実家が最近引っ越したこと、以前行ったテーマパークでの体験など、流れの中では関連しつつも様々に推移するという特徴がみられた。それに対し、20分以降は基本的に恋愛をテーマにした話題が中心であり、細かな推移はあるもののその大枠自体に大きな変化はなかった。恋愛話の合間に唯一、期末試験の評価に関する話題への小転換がみられたが、その話題導入時のZは専ら方言形を用いていた。図4の40-50分における方言形の微増は、この話題によるものである。その後再び恋愛話に移行する際は方言形がほとんどみられなくなっている点から、話題と使用形式には何らかの関連があることが予想される。

12）このように対者以上に伝統方言形式を用いる一方、方言形・非方言形ともに許容される傾向にある（4.3節）という〔同郷〕での運用特徴の不整合性について、現時点での考えを述べておく。関西でも非方言形が部分的に浸透しつつある点や、現在首都圏在住であることによる影響からか、〔同郷〕での非方言形は〔他郷〕での方言形に比べると図らずも生じやすい環境にあるといえる。こうした中、Xは〔同郷〕での方言らしさを補う意味で方言形を用いる際にはより方言色の強い伝統形を使用し、非方言形使用とのバランスを取ろうとしたと考えられる。ただこの考えは推察の域を出ず、話者への聞き取り調査等を通じて検討を深める必要がある。今後の課題としたい。

13）同じ大阪府内出身ながらZとY・Kyで伝統方言形の使用に差があるのは、各々の成育環境の違いが関係しているものと考えられる。Zは小学校から高校までを兵庫県内の学校で過ごしたのに対し、Y・Kyは小・中学校を大阪府中部、高校を同府南部で過ごしており、その過程で接触した人々の成育地の違い等が各々の使用形式に影響を与えたものと考えられる。

参考文献

宇佐美まゆみ（2015）「日本語の『スタイル』にかかわる研究の概観と展望―日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に―」『社会言語科学』18-1, pp.7-22, 社会言語科学会.

大西拓一郎編（2016）『新日本言語地図―分布図で見渡す方言の世界―』朝倉書店.

岸江信介（2004）「大阪弁の中の多様性―大阪弁の地域差と世代差をめぐって―」『日本語学』23-11, pp.28-40, 明治書院.

国立国語研究所（1991）『方言文法全国地図』第2集, 財務省印刷局.

酒井雅史（2017）「兵庫県神戸市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集（3）活用体系（2）』pp. 97-104.

真田信治（1987）「ことばの変化のダイナミズム―関西圏におけるneo-dialectについて―」『言語生活』429, pp.26-32, 筑摩書房.

真田信治監修（2018）『関西弁事典』ひつじ書房.

渋谷勝己（2002）「プロジェクトの概要」『阪大社会言語学研究ノート』4, pp.1-10, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

渋谷勝己（2008）「スタイルの使い分けとコミュニケーション」『言語』37-1, pp.18-25, 大修館書店.

渋谷勝己（2015）「書きことばにおけるスタイル生成のメカニズム―山東京伝を例として―」『社会言語科学』18-1, pp.23-39, 社会言語科学会.

寿岳章子（1997）「標準語の問題」『岩波講座 日本語3 国語国字問題』pp.167-198, 岩波書店.

陣内正敬（1996）『地域語の生態シリーズ 九州篇 地方中核都市方言の行方』おうふう.

陣内正敬（1999）「次のような場面であなたが使うことばは？」佐藤和之・米田正人編『どうなる日本のことば―方言と共通語のゆくえ―』pp.135-141, 大修館書店.

高木千恵（2006）「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」『阪大日本語研究』別冊2, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.

高木千恵（2008）「関西若年層にみる東京語の使用」『言語』37-1, pp.46-51, 大修館書店.

田中ゆかり（2011）「言語意識による地域の類型化と分類の試み」『語文』140, pp.1-16, 日本大学国文学会.

田中ゆかり・前田忠彦（2012）「話者分類に基づく地域類型化の試み―全国方言意識調査データを用いた潜在クラス分析による検討―」『国立国語研究所論集』3, pp.114-142, 国立国語研究所.

田中ゆかり・林直樹・前田忠彦・相澤正夫（2016）「1万人調査からみた最新の方言・共通語意識―「2015年全国方言意識Web調査」の報告―」『国立国語研究所論集』11, pp.114-145, 国立国語研究所.

田原広史（2006）「近畿における方言と共通語の使い分け意識の特徴―方言中心社会の提唱―」『日本のフィールド言語学―新たな学の創造にむけた富山からの提言―』pp.174-188, 桂書房.

辻加代子（2003）「京都市方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』5, pp.2-27, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

鳥谷善史（2015）「関西若年層の新しい否定形式「～ヤン」をめぐって」『国立国語研究所論集』9, pp.159-176, 国立国語研究所.

ハインリッヒ・パトリック（2016）「液状化する社会におけることばとアイデンティティ―イギリス、ドイツ、日本の比較―」『ことばと社会』18, pp.86-104, 三元社.

濱田隆文（2011）「移住と言語変容―福井県若狭地方出身者を例にして―」『待兼山論叢 日本学篇』45, pp.47-64, 大阪大学文学会.

舩木礼子（2011）「カジュアルスタイルにおける方言切換え―形式の受容と切換えの要因―」『神女大国文』22, pp.1-20, 神戸女子大学国文学会.

細谷書子（2004）「大阪市方言話者のスタイル切換え」『阪大社会言語学研究ノート』6, pp.42-63, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

山本俊治（1962）「大阪府方言」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』pp.421-494, 三省堂.

ロング・ダニエル（1990）「方言接触による方言意識と行動―移住者を対象にしたアンケート調査の自由回答から―」『地域言語』2, pp.3-12, 天理・地域言語研究会.

Labov, W.（1972）*Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Rickford, J. R. & P. Eckert（2001）Introduction. In Eckert, P. & J. R. Rickford（eds.）*Style and Sociolinguistic Variation*, pp.1-18. Cambridge: Cambridge University Press.

（博士後期課程学生）

（2019年8月8日受付）
（2019年10月15日掲載決定）